

(20) “A. M. Savatier, Ces deux volumes je vous souvenir pour remercier que suis donnée votre éducation E. P. japonicarum parties monocotyledons, Japon 5 octob. 1876, Ono-Motoyosi.”

(21) “à supprimer dans l’Enumeratio”.

(22) “à rectifier dans l’Enumeratio”.

(23) “2e Volume Addition et Correction aux noms japonais”.

(24) そのほか、サヴァティエ旧蔵書のなかには、1883

(明治16)年に出版された伊藤謙撰、柴田承桂・村井純之助校補による伊藤圭介著『増訂薬品名集』(*A Medicinal Vocabulary in Latin, English and Japanese with Appendixes by Ito Uzuru, Second Edition, Thoroughly revised, with Additions of German by S. Shibata and J. Murai, Tokio, The 16th Year of Meidgi*)が残されている。これには特段の為書もないが、背革装に金箔型押し of 背文字のある製本の仕様は日本で為されたものと考えられる。

## 新刊

□加藤雅啓・海老原 淳(編): **日本の固有植物**. B5. 503 pp. 2011. ¥3,800 + 税. 東海大学出版会. ISBN 978-4-486-01897-1 C1345.

「本邦固有」という表現は、図鑑や植物誌でよく目にするが、あまり真面目に考えたことはなかった。授業や観察会で「この植物は日本固有種です」としゃべりはするが、絶滅危惧種の候補くらいの認識だった。

2010年に生物多様性条約締結国第10回会議が名古屋で開催され、国際植物保全戦略 GSPC2010 の成果検討と次期目標 GSPC2020 の策定が協議された。その中で、自国の植物相の情報化が基本的要件であることが認識された。国立科学博物館では開館130周年を記念して、2007年に「生物多様性ホットスポットの特定と形成に関する研究」プロジェクトを立ち上げ、同館植物研究部は関連諸機関の協力を得て、ひとまず日本の固有植物のピックアップとそのデータベース作成に取り組んだ。本書はその成果の一部である。絶滅危惧種とは選択基準が異なるから、たとえばヤマツツジは取り込まれているがキレンゲショウマは入っていない。

1. 固有植物の生物学, 2. 日本の固有植物図鑑, 3. 日本固有植物目録, 4. 日本固有植物分布図の四章から成る。口絵には日本の固有科としてシラネアオイ、コウヤマキの2科、固有属としてレンゲショウマ、ヤエヤマヤシなど16属のカラー写真が示されている。

1章では、最近のDNAデータ解析にまでおよぶ植物地理学の動向と成果が、10名の著者によって紹介されており、ここだけでも一読に値する。

2章はわが国固有の維管束植物とコケ植物の簡

単な解説で、代表的なもののカラー写真が頁右端に四・五点ずつ示される。従来日本固有とされてきたが、本書では取り上げられなかった植物については、その理由が述べられている(例アオキ)。

3章は2章で取り上げられた植物の学名・和名のリストである。分類群としては種、亜種、変種のレベルまでで、品種や雑種は対象とされていない。絶滅危惧種については、ランクが示されている。以前、植物研究雑誌79巻2号(2004)で絶滅危惧植物図鑑を紹介したときにも書いたことがあるが、こういうリストでは、autonymの扱いがこれでよいのかと、私には引っかけるところがある。たとえば244頁に *Stachyurus praecox* var. *praecox* キブシとあるが、キブシは *S. praecox* の和名ではないのだろうか? 別な言い方をすれば、*Stachyurus* 属の中の *praecox* という示種名をもつ分類群全体をキブシという和名で呼ぶのではないだろうか? *Stachyurus praecox* var. *praecox* は、*S. praecox* という種の中からあらゆる種内分類群を差し引いた残りを指す名前(いわゆる「狭義のキブシ」)なので、*S. praecox* とは同じものではないし、var. *praecox* は *S. praecox* に種内分類群が新設されたり統合されたりするたびに内容が変わる。var. *praecox* にキブシという和名を与えると、*S. praecox* には和名がないことになってしまう。このことは本書について言うわけではないが、命名規約と和名の関係は微妙なので、こういう場合の和名の扱いにも、神経を使う必要があるだろう。

4章は本書で扱われた植物の分布図2,491点が一頁15図ずつ示されている。分布点の単位は標準地域メッシュの二次メッシュ(2.5万図のサイズ)である。産地記録の精度がまちまちなので、この程度にせざるを得なかったという。最後

に、和名・学名の索引がついている。

僅か二年足らずの短期間で、20 万件を超える標本データを取得整理し、産地から位置情報（経緯度）を割り出して、これだけの数の分布図を作る作業は、いくら IT 技術が発達した今日でも、超人的と言うほかはない。今後日本植物の分布や地域植物誌を扱う者は、本書を手元に置いて便利に使うことになるに違いない。図が小さいことに満足できなければ、データセットが国立科学博物館植物研究部に保管されているので、利用の途はあるだろう。IT 技術未発達の時代に、植物目録を複写して、一種類ずつ出典をつけて切り離し、植物名ごとに整理すればよいととりかかったものの、膨大な紙屑を今も抱える身としては、隔世の感がある。

今後のデータベースの管理・維持・増強は、個人の努力や能力だけでは限界があるので、専門の情報部門があって欲しいと思う。以前、外国のハーバリウムの組織をいくつか調べたことがあるが、General Service という、標本の登録や機器の操作などのいわゆる「雑用」を一手にこなす部門があって、研究員の負担を軽くしていることをうらやましく思った。わが国ではこういう部門を作ることについての理解は低いし、作っても事務系に属するから、そちらの都合で簡単に配置換えされたり、定削の対象になってしまう。

分布図作成の元になる産地の位置情報の取得に当たって、私の日本地名索引がお役にたたなかったらしいのは、残念である。「CD-ROM 地図で見る日本地名索引」は、検索と位置表示はできるけれど、それを外部出力する機能は、まだ考えつく時代ではなかった。それに最近の Windows 7 や Vista では、検索動作は正常だが分布図表示が乱れるということは聞いていたが、自分の古い PC では支障なく働いているし、近頃は新しい OS を古い OS にレベルダウンして走らせることができると思っていたので、心配していなかったのだが、..... むかし、電子媒体による記録の保存性の頼り無さに文句を付けたことがあるが、自分の作品でもそういうことが起るとは思わなかった。

不完全な産地表記の例として「武蔵高尾山」があげられているが、これには少々不満である。私より一代前の人たちの記録ならこれは当たり前で、今日の採集者がこんなラベルを作るとは思わない。もっとも、「東京都高尾山」というラベルには、いくらも出会うことがあるだろう

が..... 古い記録もすべて取り込むつもりならば、今後もこういう資料と格闘する覚悟が必要である。一方、「郵便物が届くような地名」を奨励しているように受け取れる記述があるが、これも用心せねばならない。地番や郵便番号は、人口密集地では細かいけれど、山間地ではおそろしく大ざっぱだからである。（金井弘夫）

□ 邑田 仁：日本のテンナンショウ。B5. 265 pp. 2011. 16,000 円 + 税. 北隆館. ISBN 978-4-8326-1002-6 C0645.

本書は北隆館「原色植物分類図鑑」新シリーズの第一冊として出版された。テンナンショウは特異な形をもつ植物で、多様な変異を示す。分類が難しい。分類図鑑シリーズの出発点として格好の一冊となった。本書の内容は I. テンナンショウ属の特徴、II. 世界のテンナンショウ属・節の分類、III. 日本産テンナンショウ属の図鑑、IV. テンナンショウ属の仲間、の 4 章からなり、文献と索引がつく。

第 I 章にはテンナンショウ属の概要、生活史と生態、および形態・構造の多様性が詳述されていて、この植物の全体像が紹介されている。著者の開拓した地下茎の構造から植物体の形成にいたる形質が写真と模式図で分かりやすく解説されている。第 II 章で著者は世界のテンナンショウ属を新たに 14 節に分類し、和文と英文の検索表を作り、各節の学名、形態上の特徴と記載、分布と分布図、染色体数、外国産の所属種を挙げている。各節に所属種の写真がつけられており、また随所に著者の分類学的見解が付記されていて、この属の研究現状の紹介となっている。世界に 180 種、日本に 51 種。日本の種数の多さが注目され、日本で進化した植物の代表的な一つとされるが、日本産種はわずか 3 節に限られ、しかもほとんどがマムシグサ節に属する事実には驚かされる。日本のテンナンショウ属は実感としても確かにマムシグサ類が多い。私が日本と同じようにしばしばテンナンショウに出会った東ヒマラヤではマムシグサ節はなく、ヒマラヤテンナンショウ節 *Sect. Arisaema* が分化しているという。第 III 章が本書の主眼であり、本書全体の半分以上のページを占める。著者は日本産テンナンショウ属に 51 種（9 亜種を含み、合計 60 分類群）を認めている。分類群の検索表（和文と英文）から始まり、各種ごとの解説は節の場合と同じ構成。詳細な分布図が付けら

れている。長い時間をかけて撮り貯めていた著者ならではの豊富な生態写真が素晴らしい。テンナンショウ属の多様性が多数の写真によって示されている。しかし、広義の *Arisaema serratum* グループに含まれる種は生態写真では分かりやすいように見えるが、変異の幅まではとらえにくいおしほ標本での区別も必要であろう。また、検索表に使われている識別しにくい分類形質、例えば「仏炎苞の腋部内側に隆起する細い縦筋」の有無、などは拡大写真があると助かる。第IV章は著者らが分子系統解析に基づいて設定した新しいテンナンショウ属近縁グループの12属について解説している。ここでも豊富な生態写真が楽しめる。未発表の2新属が含まれており（追記：Syst. Bot. 36: 254, 2011に正式に発表された）、テンナンショウ属グループの多様化を示す系統樹が発表されている。ここに各属の分布が盛り込まれるとテンナンショウの進化について読者のイメージはさらに広がるかもしれない。

本書は著者積年の研究成果である。本書によってテンナンショウの魅力は十分に伝えられるだろう。テンナンショウ属の研究は本書を土台として今後さらに進むと思われる。著者にテンナンショウ研究を託した私としては（もう30年も経ってしまった）本書の出版を心から祝いたい。本書は英文でも刊行されるべき本である。世界のテンナンショウを扱った Gusman and Gusman (2006): *The Genus Arisaema* があり、ここでは日本の種は主に Ohashi and Murata (1980) に基づくが、この本は園芸を主眼としている（テンナンショウ病は世界にかなり蔓延している）。著者のテンナンショウの見方や新しい日本の種の分類について外国の研究者が読めないのは惜しい。世界で研究が進み、テンナンショウ属がさらに分かるようになることを望みたい。（大橋広好）

□邑田 仁：日本のテンナンショウ。B5。265 pp. 2011. 16,000 円 + 税。北隆館。ISBN 978-4-8326-1002-6 C0645.

四部より成る。Iではテンナンショウ属の特徴と題して、生活史、生態、形態の多様性（とくに地下部と葉序）、花と花序、花粉と染色体などを取り上げている。

IIでは世界のテンナンショウ属・節の分類と題して、14の節の和英文による検索表と各節の概説がある。分布図では多くの節は東亜温帯にあり、

一部の節が東亜～北米西部、ヒマラヤ～アフリカ、東亜熱帯へ広がっているが、世界的に見ると日本で感じるほど普通なものではないことがわかる。

IIIは日本産テンナンショウ属の図鑑で146頁にわたり、51種とその亜種の和文英文の検索表が先頭14頁を占める。見開き二頁（ときに三頁）で一種あるいは一亜種が解説されており、その2/3ほどはカラー写真で、分布図を伴う。

IVはテンナンショウ属の仲間と題し、*Arisaema* 近縁属の検索表が和文英文で示されている。これには葉緑体DNAの塩基配列に基づく系統解析がとりこまれ、とくに *Typhonium* はいくつもの属に仕分けられて、新属名に基づく学名が仮提示されている。

写真のほとんどすべては見事なカラーである。分布図もカラーだが、マーク、分布線、境界線の重なるところでは見分けにくいものがあり、色や線種の選択に編集側がもう少し気をつけてくれれば、見やすかったのと思う。またアップの写真ではスケールがあれば...と思うものがあるが、これは撮影環境がさまざまなので、努力目標というところ。Flora of Japanの出版が終われば、次はこういうモノグラフものに移るだろうからあえて細かいことに触れる。

奥付に著作権に基づくコピー禁止の注意が二つあり、北隆館のものは「理由の如何に関わらず当社の許諾なしに複写・転載禁止」としてある一方、著作権管理機構のものは「著作権法上の例外を除き禁止」となっている。私がある図鑑を私用にコピーしたとき、念のため著作権管理機構に問い合わせたところ「私的なコピーは該当しない」という返事で、出版社も同様な返事だった。その本の場合には著作権管理機構の注意しか示されていなかった。この本の場合はどちらをとればよいのだろう。出版社が著作権管理機構と異なる見解を持つのなら、機構に委託するする必要はあるまい。

（金井弘夫）

□木場英久・茨木 靖・勝山輝男：イネ科ハンドブック。18×11 cm. 146 pp. 2011. ¥1,600 + 税。文一総合出版。ISBN 978-4-8299-1078-8 C0645.

いわゆる「長もの」は苦手である。図鑑にいくら詳しい図や写真や説明がついていても、どの頁を見ればよいかわからない。検索表に出てくる術語も、たどって行くうちにこんがらがって、また振り出しから出直しを繰り返す。まじめに勉強

しないから、いつ迄もわからないままである。本書では、タケ類をのぞくイネ科植物 134 種類の、花序の原寸大スキャン写真をメインに据え、まず絵合わせで実物と似たものを探し出し、それから同じ頁に示されている、小穂や着目点のアップ写真と比較して、対象をしぼってゆくという方針である。一方、全体を花序の形から六つのグループに分け、それぞれの種類に到達する検索表が先頭 8-17 頁にある。この方式の検索表は長田武正氏の日本イネ科植物図譜で見たことがあるが、ここではグループごとに異なる色の見出しがあり、図の掲載頁の肩にそれと同じ色が付けられているので、慣れた人なら目的の頁を直ちに開くことができる。拡大写真には原則としてスケールバーが付いているので、数字で比較したい人には役に立つだろう。これまでのカラー図鑑は生態写真が主体だったが、ここではおしば標本のような原寸スキャン画像なので、現場で手にした実物を比較するのに都合がよい。本のサイズも、そういう利用を前提としているのだろう。説明はごく簡単だが、種類の区別点については拡大写真を使って詳しく述べられている。

図鑑類は技術の進歩と共に次第に使い勝手のよいものに進化してゆくが、どうしても分類体系というもののから離れられない。私のところには犯罪現場から採取された植物試料や、食品に混入した異物などが持ち込まれ、その鑑識（これも identification）を依頼されることがあるが、ほとんどが小さな破片や種子などで、ごく限られた形質から元の植物を推定せねばならない。だから葉縁だけとか、表皮組織と気孔だけとか、葉脈（細脈）だけとかの図鑑があって、その識別・判定の手段が提供されたら、従来とは異なる性格の図鑑が出来、従来とは異なる利用が期待されると思う。この場合、種類の同定までできなくても、「何の仲間」とか「コレとコレとコレのどれか」と、範囲を絞られるだけでも有用だろう。

考古学的調査では「イネのプラントオパールが見いだされたので、当時稲作が行われていた証拠だ」という新聞記事をときどき見るが、イネに特有のプラントオパールがあって、他の植物にはないということを、どうやって確かめたのか、疑問に思っている。もしこういう風に、ある種類に特有の物質なり形なりが認識されるのなら、種類の同定はとてもやり易くなり、分類学研究者が「コレ何ですか？」という質問に悩まされるリスクは

低減するだろう。イネ科植物の組織や部分は残りやすい。そんな図鑑ができないだろうか？ DNA 利用の同定チップなどは、期待されるものではないだろうか？（金井弘夫）

□黒田祐一：身近な地名で知る日本 1～6. A4. 2011. ¥20,475 + 税. 小峰書店. ISBN 978-4-338-26500-3 C8325.

1. 地名で知る自然, 2. 地名で知る暮らし (1), 3. 地名で知る暮らし (2), 4. 地名で知る歴史, 5. 地名を楽しむ (以上各 44 pp.), 6. 総索引 (32 pp.) の 6 分冊から成る。本誌 82 巻 6 号で紹介した「植物の力」と同じ企画で、小学校高学年以上向けの図書館用堅牢製本、函入りで 3.4 kg ある。函の蓋が邪魔という印象は、前報と変わりがない。文よりも写真や地形図を多用して、興味を引くように作られている。地形に基づく地名、古来の部族・習俗・行政・信仰にかかわる地名、動植物に関わる地名など、文字が少ないから頭へ入り易い。民俗植物学をやろうとする人には参考になるだろう。

「CD-ROM 地図で見る日本地名索引」（金井 1998）を利用して描いた地名の全国分布図が、各所に示されている。地名研究の発表の多くは、自分の縄張りの中や、任意に拾ったケースを対象に議論を展開することが多いように見受けられ、先ず全国分布図を描いてから、それをタネに議論する習慣はこれ迄薄いように思われたが、ようやく利用してもらえたという感じがした。地名索引 CD-ROM は、最近の OS では検索はできるけれど、作図にはエラーが出ることがあると聞いていたが、他分野で使ってくださる例が出てきて、一安心した。（金井弘夫）

□岩津都希雄：伊藤篤太郎. B5. 279 pp. 2010. ¥2,400+ 税. 八坂書房. ISBN 978-4-89694-964-3 C0045.

著者は伊藤篤太郎の妹の孫。皮膚科の医師で、真菌学専攻。残された資料をはじめ身内の情報も動員して、きめ細かい記録となっている。小学生時代に不登校だった篤太郎が、祖父の伊藤圭介の手元で薫陶を受けたことが、将来を決めたことと察せられる。有名な破門草事件のなりゆきも、たいへん詳しくいきさつが述べられている。その影響によるであろう、大学への就職ができない状況下でのさまざまな活動や、植物以外の菌類や昆虫

についての業績も、詳しく拾ってある。先に紹介した「書簡集からみた宮部金吾」にも、篤太郎から就職自薦の記録がある。末尾には参考文献 169 点および詳しい年譜がついている。本書では学名や命名規約に関する記事が多いので、専門外の人たちの理解に資するため、巻末に学名関連用語の解説が 6 頁にわたって記されている。(金井弘夫)

□山田 順: 出版大崩壊 電子書籍の罨. 新書版. 253 pp. 2011. ¥800+ 税. 文春新書. ISBN 978-4-13-063327-7 1045.

著者は光文社で永年編集に携わった後、独立して電子出版に参入したが、その将来に幻滅すると共に、電子出版の隆盛が既存の「出版」という事業を消滅させるばかりでなく、電子出版自体も従来の「出版」が維持してきた文化的水準を無にするおそれがあることを警告するものである。近頃では自費出版という仕事は、パソコンの発達で誰でもできるようになった。文献コピーもスキャナの進歩で、本一冊をレンズの下でパラパラとめくだけで、紙面の歪みを補正しながら紙媒体でなく記憶媒体にとりこめる。これを OCR に通せば、完璧とは言えないまでも、文字列検索にかかるデータとなる。従って本を買う必要がないばかりか、書棚というものが不要になる。おまけに、その結果を大規模サーバーに登録してしまえば誰でも閲覧でき、その閲覧数に応じて作者はリベートを得ることができる。利用者は必要に応じて自分の記憶媒体にコピーできるが、これは「私的複写」だから、著作権保護の対象にならない。その上紙媒体と違って、動画や音声まで取り込むことができる。Google は、グーテンベルグ以来のすべての文献を、このようなサーバーに収容する事業を進めているようだ。

従来の「出版」は、原稿の吟味、編集、校正、印刷、製本、流通、販売... と、数多くのプロセス、したがってそれに従事する人たちの生活を前提に成り立ってきた。著者が出版社を通さずに作品を直接登録公表できる電子出版が隆盛になれば、従来形式の「出版」は成り立たなくなり、出版社はやって行けなくなるだろう。事実、出版業の衰退はすでに始まっており、電子出版に軸足を移す社が増えているが、圧倒的に先行するサーバー業界に太刀打ちできない。同じ理由で、書店、音楽 CD 販売店、ゲームソフト界も、急速に衰えているという。

一方、わが国の電子書籍売り上げ額は世界有数の規模であるが、その主要部はケータイマンガで、内容は成人用コミックから少年少女対象のラブストーリーが圧倒的なのだそうだ。編集者の立場から見ると、見るに耐えないカスばかりなのだが、自由に登録できるから、そういう作品が入れ代わり立ち変わり現れ、かつ読者は増える。たとえ識者お墨付きの古典や優秀作品があっても、アクセスは顕微鏡的だろう。だからそういう著者がペイするだけのリワードは期待できない上、売り上げを見込んで内容を吟味し、稿料を前払いする出版社という業態がなくなってしまうので、「著作業」という職業も成り立たなくなるし、「本」というものを貯蔵しておく必要もなくなる。つまるところ紙媒体による「文化」は消滅して、電子媒体上のデータだけが残る... という筋書きである。

こういう現象はサイエンスの世界でも起っている。先端的分野の発表誌はすでに電子版が主流である。それを紙媒体に記録・保存する意義は希薄である。数年たてばかえりみられる必要もなくなるし、必要なら電子記録を参照すれば済むことなのだから、なけなしのスペースを使って印刷出力を積んでおく必要はない。だが、その電子記録に永続性があるのだろうか？どこかのサーバーが圧倒的なストックを誇っていても、その会社がつぶれたら、蓄積は 0 になってしまう。どこかにコピーが残る保証はない。OS が変われば、その下で動いていたソフトは使えなくなる。字体のコードが変われば、どの文字が「正当」なのか分からない。ドライブが進化すれば、読み出せなくなる。ヒョンなきっかけから、ミニコン時代からコンピュータに付き合ってきた私には、そういう経験が山ほどある。メモリー媒体が進化すれば、旧メモリーの内容は受け継がれない。ハッカーが忍び込めば、記事の内容が変わったことさえわからない。政治的環境変化でも、そういうことは起こり得る。分類学の論文のように、新名発表の日付や頁や行の位置を云々せねばならない分野では、書式の僅かな変化でも問題になりかねない。もっとこわいのには、「標本なんてかさばるものを後から後からため込まないで、『情報化』したら捨ててしまえ」「国会図書館に行けば何でも閲覧できるのだから、利用頻度の低い文献は処分せよ」とおっしゃる博物館長がいる(いた)ことである。この本の予言は近く現実のものになるだろう。世の中の趨勢とはいえ、よそごとではないと感じる。(金井弘夫)